通信第六十九号　如来さまに消化されて

十月の過密な日程が終わりました。どの御縁も貴重で緊張感あふれる場面の連続でした。そういうことで通信を書かせて頂ける時間が取れず遅れてしまいました。三十日の夜中に帰寺して今日は三日目です。留守中の事の整理などが終わり畑仕事、温泉、勤行、散歩と休養が出来て日常生活が戻ってきました。今日の昼からはリモート法座があります。

今朝のお朝事の時、次のような大石先生の御文章に遇わされました。

帰命となったら、仏様が私を消化して、私が消え、そして、仏様のお徳の中に、仏様の一徳

として、生まれさせてくださるのです。私の中でご信心となって生活してくださるのです。だから、みなさんをお迎えし、お話をさせていただきながら、私が育てていただいている気持ちなのです。迎える者、迎えられる者、双方に仏様が働いてくださり、法座が開かれるのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信第６３信―１０

十月二十六日の由布市の正観寺さまから三十人のご参詣を受けご法座が開かれました。法喜前坊守と私のご法話を聴聞してくださいました。熱が入り、南無阿弥陀仏の歌なども共に歌わせて頂きました。今時の寺としては珍しいわいを感じました。大石先生のみ教えの通りのご本願がはたらいていると実感させられたことであります。来年からは私達二人を招いて下さり定期的に婦人会を中心としたご法座を開かれるそうです。住職さん、坊守さん、ご門徒さん方の熱意が伝わってきました。

　如来さまが私を消化するとは、という事でありましょう。読み人知らずの次の歌があります。

　手はつけど　頭の高い　かな　（十九の願）

　れていて　雨を欲しがる　蛙かな　（二十の願）

　力尽き　みあげられし　蛙かな　（十八の願）

　「汲みあげられし」は如来に摂取され願力に乗せられていく事でありましょう。その前に「力尽き」があります。自力我慢がつきるところであります。帰命と摂取は同時であります。清沢満之先生は「」の中で

自力の無効なることを信ずるのは、私の智慧や思案のありたけを尽くして、その頭のあげようのないようになる、ということが必要である。これがはなはだ骨の折れる仕事でありました

と告白しておられます。裏から言えば本願に帰依するまでの如来さまのごでありましょう。法蔵菩薩さまのご思惟、ご修行のお陰ということであります。東京大学の哲学科首席であり、人格円満、真面目一筋の清沢先生が自力無効になる事は大変なことであったにちがいありません。

私においては両親の事、子供たちのことが無ければならなかったのです。通らなければならない必然の事であったのです。世間で言えばどうしようもできないつらいことや、世間から落とされたときをご縁として、それまで聞法して来た他力の世界が開かれてくるのであります。この事は世間とはまったくの逆方向であります。世間では落ちまい、落されまい、何とか一つでも上がりたい価値観ですから。真宗のほんもののご法話は分からない、聞きなくないというのが必然の事です。世間の延長線上ののよい話や愉快で面白いお話なら聞きやすいかもしれません。しかし、それでは真の救いは遠いのであります。

苦しくてもまだ私に余裕のあるころでした。別府に家族で珍しく行きました。そこの温水プールでじょうごのような大きな入れ物に落ちてさらにぐるぐる回りながら下に落ちるという遊びがあり自分と一緒だなと思われ何度もそこに入りました。また真っ暗なトンネルのなかをジェットコースターのように暗黒の中をくるくる回って水中を落ちるという乗り物にも「今の俺と同じだ」と心の中で叫びながら何度も乗りました。苦しみつつ出口の無い頃でした。これが一番最低だともがいていても、次の事件が起こり、まだあの時は今より良かったと何度も落とされ続けました。

親子関係、夫婦関係、子、孫のことなどのご（目覚めよとのお呼びかけ）があります。しかし、悲しいことに自分自身が助からないことには呼びかけであることなど思いも出来ないことでした。背後の願いがわからないために起こる事件は多いと思われます。光への方向がないから、心の闇の中でやけを起こし悲劇が起こるのです。新聞などの悲しい悲劇を見ると私は他人事とは思えない時があります。

曇鸞さまは「業道経」を引かれて、業は重い方に傾きかれることを述べられています。

　五逆・十悪などの罪をつくる人は、自らの（いつわり、さかさま）の思いにとらわれて罪をつくる。この十念（南無阿弥陀仏）は、仏がいろいろ手立てを尽くして慈悲心から実相の法すなわち南無阿弥陀仏のご本願を説かれるのを聞くことによって生じる。

一方は、一方はである。くらべものにならないほど南無阿弥陀仏のほうが重いではないか。たとえば、千年このかたの（闇の部屋）に、もし光が少しでもさしこめば、そのときたちまち明るくなる、というようなものである。闇が千年もあったからといって、どうして闇が晴れないということがあろうか。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　解読浄土論註・上巻１４０頁

　人間の思い、計らいと仏の智慧とは次元が全く違うのです。若い頃、私は本が好きになり、夢中で本を読みった時期がありました。ところが内容を消化しきれずに今度は言葉にられる、ちょうどが口から出した糸での殻ができるように言葉の殻の中で身動きが取れなくなり、あえぎ苦しむという時期が長く続きました。その果てに大石先生との出遇いがありました。

先生からという言葉の消える世界があることをお教えいただき、一条の光を頂きました。

しかし、それから身心に光明を体験されるまで二十三年かかりました。私において人間の智慧から出た言葉は闇を破るどころか闇が深まるばかりでした。心理学や思想や哲学や分析学そして頭で理解する教義では私は救われませんでした。救われて道を得た人のお育てに遇わなければ私は永遠に六道をさ迷ってこの世を終えたでしょう。死にきれないまま悔しく終わっていたのです。

同じ言葉でも道理であっても内容は天地の違いがあります。親鸞さまの「無義をもって義とす」とのお心はそういうことではないでしょうか。

　ここで、私と同じような歩みをされている若い求道者の手紙を紹介させて頂きます。彼はさんといいます。毎月の本願道場（聞光道）へ父君の清英さんと欠かさずに参加されます。リモート法座にも時間の許す限り月に四回参加されます。信境がぐんぐん深まっておられます。若いのでたのもしいです。

　　　今先生に教えて頂いる課題は直入の信心（十九願より十八願）から転入の信心（二十願より十八願）に入れしめられるの問題であると思います。皆さんのお話を聞かせて頂いて、共感するところが多いです。十八願は業によって早い遅いはあれど、要所を通らせて人を招喚すると思います。

　　　　私においては二十二歳になって三週間ほどのときに、一度大きな宗教的体験がありました。自分と自分自身との分裂が一度なくなる（直入の信心）ものでした。しかし、それからすぐ始まったことが、それまで見えなかった自分の心の動きが見えるようになり、驚き引っかかるようになったことでした。

　　　「煩悩にわれる」ことに執われるという状態です。たとえ一度離れさせてもらっても、まだ色濃く自己に執われる状態です。「歎異抄」九章の所であると思います。唯円さんも「の心おろそかにそうろう」と一度がすたって歓ばれたが、法に帰ったのではなく、自我の状態に帰ってしまった。まだもう一段深い本願の世界に目が開いておらないのは私も全く同じです。ですからご廻向があっても、スッキリしたとか、せんとか、自分まで偉くなったように鼻が高くなる。二十願はこういう問題をはらんでいるのではないかと思います。

　　　私自身の具体的な最近のひっかかりは、名聞（自意識）が強く法事のあと少し話をするようにはしていますが「下手な話はできん。うまく話そう」こういう心が動いて、一歩出ない時があります。先生が「法蔵菩薩が話すのを自分が見せてもらう」と言われたことが印象に残っています。先生が「識の世界が仏智不思議の中に没する」こういう転換を通おらないと本当に話すということも出てこないのでしょうか。「法はにて機はなり」と時間がかかる事だと思います。またお育てよろしくお願いいたします。

　　　毎月送って頂く寺報の先生の日程には驚かされます。ご多忙でしょうから、返信等は大丈夫です。聞法会で皆さんの話を聞かせてもらっても私と同じような事で悩まれていますから自然とこの問題の話になると思います。そこでまた聞かせて下さい。後略

　悩む姿が尊いですね。以前大阪に勤めていた時の先輩と三十年ぶりにお会いした時に「悩

まんならんことを悩んでいる人がおると思っていた」と言われて驚いたことがあります。最近私

はあの得体のしれない暗い時期が長かったお陰とも思わせられます。実は生まれる前からの無明

の深い背景があったのです。簡単に闇が晴れなかったからこそ大石先生に出遇わせて頂けた、と。

　　の苦をすてて

　　　浄土無為をすること

　　　本師釈迦のちからなり

　　　長時に慈恩を報ずべし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　善導大師和讃

また、これは到達ではありません。これまでの私でしたら、スポーツでも音楽でもやり切ったと思うと何か意欲が落ちてやめてしまうことがよくありました。真宗はそうではありません。「初一念」と言われる初め、スタートを賜るのです。永遠のスタートですから飽きが来ません。いつも新鮮です。清水や温泉がこんこんときだしてくるように私の思いを破って湧き出てくるのです。それまでの私でしたらスタートがないまま人生を終わっていたのです。同行の友松法純さんが「今までの人生は準備体操だった」とおおせられたはずです。私も長く暗くうつむいていたはずです。それがご縁となったのです。

　浄土の菩薩は「如を体として行ずる」とあります。

　　真如はこれ諸法のなり。躰、如にして行ずれば、すなわちこれ不行なり。不行にして行ずるを如実修行と名づく。

常識では我執を躰として行ずるのですから、また、我執の流転です。「こんなはずじゃなかった」という世間はの声ばかりです。「躰、如にして行ずる人生」にはむなしさが無いのです。人生に失敗が無くなるのです。浄土に遇うための人生ですから大目的が遂げられるのです。

　新潟での本願道場でのことです、九十五歳の立派な僧侶の方が参加してくださいました。数年前、寺を閉じられたとのことです。身辺にこういうことが起こり始めました。墓じまい、仏壇じまい、寺じまい、いよいよ法滅の時代です。そのかたに言わされました「何百年続いた寺が一カ寺つぶれてもあなたが信心を頂いたら死んで行けます。寺をつぶすことは大罪人です、ただし、その大罪人目当てのご本願です。善人ではいつまでたっても救われません。死ねません、ご本願を頂いたら死ねるのです」自分から出た言葉に私が驚かされました。何かそのかたのお顔が明るくなられたようでした。林住職さんがあの方のあんな嬉しそうなお顔は初めて見ました。それを聞かせて頂いて本願道場に来らせて頂いた甲斐があったなと思わせられました。また、その後の総代さんの感想で「超えた人にはかなわんな、思わず来年も来て下さいといったよ」と言われましたと林住職さんの嬉しそうな電話の声に深い後味のよい余韻を頂きました。

書信第６３信の８頁には

仏様のご本願に「帰命」したら、どういう世界が開けてくるのでしょうか。帰命せしめたも

うた如来様が、帰命した私の上に現れて、如来様のお浄土へ迎えて下さる旅を始めてくださるのです。

このたびの一連の法の旅はそのことを見せて頂きました。諸仏様方が如来さまをほめたたえて下さっていたのでした。これまでの私は「自分がめられたいばかりで生きて来たのだな」とまた知らさました。藤解先生が「褒められてもわしは取らんよ、如来さまにお返しをさせて頂く」と、大石先生は「念仏はお礼です」と、どこまでもよき師のお育てのお陰であります。

令和五年十一月六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝